



鈴木氏のアトリエ（提供：鈴木まもる）

鳥から学ぶ巣の形

Architectural inspiration from birds' nest morphology

画家 / 絵本作家 / 鳥の巣研究家 京都大学教授 (建築構造学)

鈴木まもる × 大崎純 対談

Mamoru SUZUKI

Makoto OHSAKI

一般に動物の住処を指す「巣」のなかで、この企画では鳥の巣に注目する。身の回りの物を拾い集め、構造的な知識をもたず設計図も描かずして生まれた巣の形態には、目を見張るものがある。巣の研究の多くは環境や生態に関するものであるが、今回は構造的な視点からの追究を試みる。

対談に先立ち、鈴木氏の著書である『鳥の巣の本』『世界の鳥の巣の本』『生きものたちのつくる巣 109』『鳥の巣いろいろ』から大崎教授に興味をもった形態の巣を選んでいただき、鈴木氏にはそれらの巣のつくられ方、その鳥の習性等について資料をご用意いただいた。

聞き手：雨宮美夏 石原佳苗 竹岡里玲英 久永和咲

2020.8.4 ZOOMにて



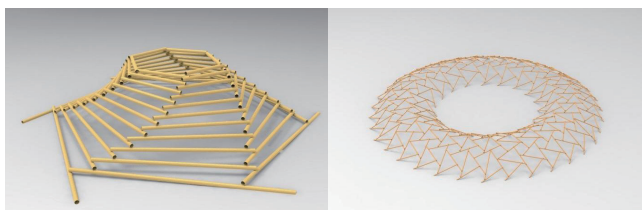
鈴木まもる（左）大崎純（右）以降敬称略



Makoto Ohsaki

大崎——私は構造の形を決めるような研究をしてきたので、建築の中では特殊な形状に興味があります。生物に学ぶということも、以前から研究のなかで色々調査していました。今回このような機会をいただいて、非常に嬉しく思っています。

鈴木——僕は子ども向けの絵本を描いています。30年くらい前に今住んでいる伊豆の山の中で暮らすようになり、家の周りで、使い終わった鳥の巣を目にするようになりました。僕は絵も描くことも、動植物も、物をつくるということも好きなので、最初鳥の巣を見つけて造形として興味をもち、鳥の巣の世界に入り込んでいったんです。自分なりに造形的なことを調べたり、鳥の巣関係の本も出したり、展覧会で実物の巣を見てもらったりしています。

図1 キジバトの巣
(提供：鈴木まもる)図2 レシピロカルストラクチャー
(提供：Dr. Yan Su and Prof. Yue Wu, ハルビン工業大学)

鳥の巣の形を読み解く

多様な鳥の巣

——まずは、大崎先生が興味をもたれた巣についてお話しいただきます。

【キジバト 雑然とした巣】

大崎——キジバトの巣(図1)は雑然とした形で、単に枝を積んだだけのように見えますが、力学的にどのように成り立っているのでしょうか。建築の構造に、割り箸を交互に組み合わせる屋根のようなレシプロカルストラクチャーという構造(図2)がありますが、これは力学的には弱いので日本ではほとんど見ませんし、恒久的な建物には使われないと思います。摩擦と接触による機構で成立しているのですが、キジバトもそのようなことを知っているのでしょうか。キジバトの巣材の細い枝がどのように組み合わせられているのかお聞きしたいです。

鈴木——枝の分かれ目などに、棒を置くようにしています。おわん型の巣と違って、キジバトさんの巣は平たいので細い枝を木の枝にとめずに乗せていく感じですね。ですから、おっしゃるように構造的には弱いです。少しずつ差し込んだり、上から押し下げていくことで、だんだん定着していく。キジバトさんの場合、巣づくりの最初はメスがいつも巣をつくる場所に来て、オスが巣材を運ぶんです。

大崎——大きい巣材を持ってくるわけではないですよね。どのように置いていくのですか。

鈴木——オスが巣材をくわえて持ってきて、メスに渡すとメスが自分の体の中に差し込んでいき、体で押しつけて維持していくような感じです。だから、他の巣に比べるとかなり壊れやすいです。

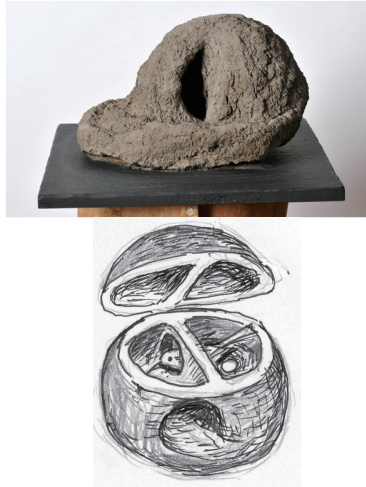


図3 セアカカマドリの巣 (提供: 鈴木まもる)
穴の奥の壁面に入り口があり、左側の部屋に入れる

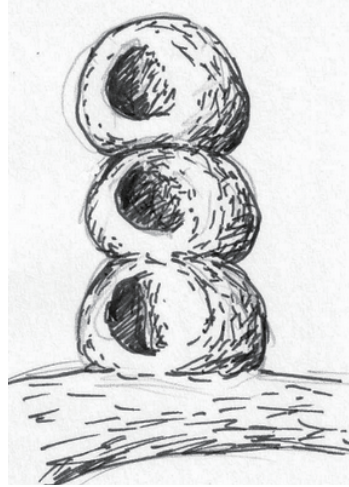


図4 積み重なったセアカカマドリの巣
(提供: 鈴木まもる)



図5 コメンガタハタオリの巣
(提供: 鈴木まもる)

【セアカカマドリ 固い泥の巣】

大崎——セアカカマドリの巣 (図3) は泥でできているのですね。枯れ草に泥をかけていくのですか。

鈴木——ツバメさんも口の中で土と藁を混ぜて運びますが、これもそうですね。泥の割合が高くて、結構重いです。土をクチバシでくわえてペタペタとこねていったり、足で踏んだりしています。

大崎——藁を混ぜて強度をあげているわけですか。木造の家の土壁みたいですね。

鈴木——はい、これは本当にカチンカチンです。もうものすごい固さです。この鳥が息する地域の人はこの鳥の巣を真似して土に藁を混ぜて土壁をつくるようになったといわれています。

大崎——コンクリートは普通、鉄筋を入れますが、最近は繊維補強という細かい繊維を混ぜる方法もあります。ですから、土壁のような構造にも似ているということですね。建築や機械構造にはシェル構造という曲面によって強くする構造があります。この巣もシェル構造みたいなものだと思います。非常に頑丈ですね。

鈴木——そうですね。鳥はある一定期間は巣に住みますが、巣立ってしまうともう使いません。巣立つまでの間きちんと維持されるように巣をつくります。セアカカマドリの巣は固めてあるので今も壊れていませんが、通常は雨風で壊れてしまうので、その度につくるということになっているのだと思います。

大崎——では、この頑丈な巣も1回しか使わないのですか。

鈴木——はい、巣立ちまでの2ヶ月くらいですね。飛べるようになったら外の方が安全なんです。万が一、蛇とかが来てしまうと逃げられないじゃないですか。

——壊れないのに1回しか使わないのは、自分でつくった巣の方が安心だからですか。

鈴木——そう、やはり自分でつくったということが安心感を生むので、他の個体がつくった巣が残っていたとしてもそれは巣として認知しません。これもセアカカマドリの巣なんですけど、巣が積み重なっているでしょう (図4)。下の巣はもちろん壊れていませんが、自分でつくらないと安心できないのだと思います。この巣 (図5) も同じです。使い終わった巣の下に全く別の種が、巣をつくりますが、場所として利用しただけで、繋がっているわけではありません。

大崎——巣をつくるのに適した場所というのがあるわけですね。

鈴木——セアカカマドリの巣だと高い枝の上や、人間の建物の壁にもつくってしまうようです。僕が持っているセアカカマドリの巣は、牧場の杭の上にあったそうです。敵が襲ってこない、安全だと思える場所に巣をつくります。



図6 カンムリオオツリスドリの巣
(提供：鈴木まもる)



図7 ハシブトハタオリドリ
(提供：鈴木まもる)



図8 キムネコウヨウジャクの巣 (提供：鈴木まもる)

左：下の筒状部分が入り口、丸い部分が産座。人間の妊婦さんのお腹の形と同じ
右：巣の形成過程



【カンムリオオツリスドリ 上から吊られた大きな巣】

大崎——カンムリオオツリスドリの巣(図6)は最初に見たときつくる順番が分かりませんでした、上からつくっていくんですね。ぶら下げながら編むということですが、鳥はどのように編むのでしょうか。

鈴木——これが実物です。

大崎——すごく大きいですね。

鈴木——もっと大きいものもありますよ。上から順に繊維を絡めていって下に下に垂らしながら、クチバシで編み込んでいきます。適当な長さになったらおわん型をつくって閉じます。

大崎——植物の繊維を編むのですか。

鈴木——はい。枯れ草や根を使っています。

大崎——カンムリオオツリスドリの巣は一番上に重さが全部かかっていますので、上が丈夫である必要があると思うのですが、どのようになっていますか。

鈴木——一番上は枝に絡めて巻きつけるような感じ。枯れ草は細いですが、かなりの数が絡み合っているので、相当な強度だと思います。ハタオリドリ(図7)だと、ヤシの葉っぱを細くさいて、枝先の二股に絡めて編んでいきます。やっていることがものすごく細かいですね。

大崎——接着はしていないですね。

鈴木——クチバシで入れたり出したりして、編み込んでいきます。

大崎——巣づくりにはすごく時間がかかりそうですが、どれくらいの時間でつくるのですか。

鈴木——交尾したあと卵を産むまでのあいだから、そんなに長い時間ではないです。おおよそ2、3週間くらいでしょうか。個体差もありますし、鳥の種類によっても異なりますが、何ヶ月もかかるものではありません。

大崎——私の部屋のクーラーの排気口のところにツバメが巣をつくったんですよ、今年(笑)。5月ごろヒナが鳴いてうるさかったんですけども、そのときも2、3日で、一瞬のうちに出来たんですね。

鈴木——ツバメさんはかなり速いですよね。あれは水を混ぜているので、あまり一度につくと落ちてしまうから、半日くらいで中断して乾かした後、また付け足していきます。

【キムネコウヨウジャク 揺れを受け流す巣】

大崎——キムネコウヨウジャクの巣(図8)は、風で揺れても卵が落ちないのですか。

鈴木——はい。産座(卵を温める場所)はお椀型に区切られているので卵は落ちません。キムネコウヨウジャクの巣自体は数グラムじゃないですかね。鳥の巣で重いのはセアカカマドリくらいで、あとは本当に軽いです。でも強度的にはしっかり枝に固定されているので、巣も落ちることはありません。

大崎——軽さと強度には、内部構造も関係すると思います。風が吹くと揺れるわけですよね。細いところを固くつくと、ポキッと折れてしまいますが、柔らかくすると、風や地震で揺れても、なかなか折れない。建築の力学という柔

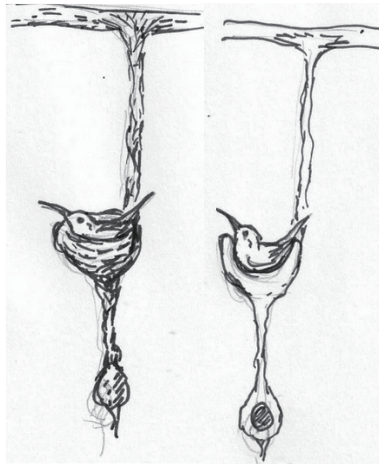


図9 コシアカユミハチドリ
の巣 (提供: 鈴木まもる) 図10 アカガシラモリハタオリドリ
の巣 (提供: 鈴木まもる) 図11 シャカイハタオリドリ
の巣 (提供: 鈴木まもる)
何百羽もの鳥が毎年増築していく。

構造です。例えば、建築の超高層のビルは揺れるように
くっつけてあるので、それと似ていると思います。そういうこ
とも鳥は知っているわけですね (笑)。

鈴木——ええ、キムネコウヨウジャクのなかには巣の中に
泥を塗ってるものがあるんです。時々泥を入れて、あまり
揺れすぎないように考えているのかもしれない。

大崎——はい、風には揺れにくいと思います。

鈴木——ハチドリの子の鳥で、巣の下の方に小さい石を
クモの糸で巻き込んで重しにする鳥もいます (図9)。先
の方は揺れやすいんですけど、これだと揺れが少なくなる
んです。

大崎——場合によりますが、重しを入れている方が安定す
るということですね。長さによって固有周期が変わるので、
揺れ方も変わると。重りを入れて張力が変わる効果がある
というのは、非常に面白いですね。

**【アカガシラモリハタオリドリ・シャカイハタオリドリ
気候に適した巣】**

大崎——鳥の巣は、暑いところと寒いところで性質が違
うんですね。

鈴木——環境はものすごく大切で、それぞれの環境に適
した形や材質になっていると思います。

大崎——例えば、アカガシラモリハタオリドリ
の巣 (図10) は通気性が良いと『生きものたちのつくる
巣109』に書かれていますが、生息地はアフリカですか。

鈴木——はい、南アフリカですごく暑いところ
です。なので、よく見ると結構粗い枝で出来て
いるんです。鳥さんは、細い枝の皮を剥いて、
その皮を他の枝に結んでつくっています。

ハタオリドリというのは総称で、ほとんどはヤシ
の葉っぱを編んでいくのですが、この種は枝と
枝の接点を結んでつくっています。

大崎——すごい技術ですね。

鈴木——だから、見た目はスカスカしている
のですが、触るとガッチリしています。風通し
が良いけれど、壊れない。その環境に適
応して、いろいろその場で工夫した巣を
つくっているように感じられますね。

これはシャカイハタオリドリという鳥の
巣 (図11) で、アカガシラモリハタオリ
ドリの巣がいっぱい集まったと思っ
てください。10mくらいあります。一羽
の鳥の巣じゃなくて、何百羽がみんな
で共同して、大きな巣をつくって
いきます。なぜかというところは砂漠
地帯だからです。日中気温は40度
以上になりますが、夜は-10度以下
になってしまう。ところが巣と巣の間
を草がびっちり埋め込んでいて壁が
厚いので巣の中はいつも26度に保
たれているんです。人間が草を集めて
つくる茅葺屋根と、見た目は同じ
ですね。

日中は巣の中で涼んで、夜は巣の中
でおやすみすること。この子たちに
限って、巣立った後もここで一年中
暮らすので、毎年繁殖期に新しい
巣を増築し、巣は年々大



図 12 チャイロニワシドリの東屋 (提供: 鈴木まもる)

きくなっていくのです。

【ニワシドリ 求愛の舞台】

鈴木——ニワシドリの東屋(図 12)というのは巣ではなくてオスがメスを呼ぶためにつくるものなんです。ニワシドリは、この東屋づくりが上手かどうかでオスを選びます。ここでは卵も産まないし、暮らすこともないんです。巣はメスがこのそばにつくります。

大崎——チャイロニワシドリの東屋は、柱のまわりにつくっている訳ですね。

鈴木——はい、そうです。この写真は、東屋の中の柱の根っこの部分なんですよ。

——元から生えている枝のうち1本を太くしていくのですか？

鈴木——1本自然な木があって、そこに苔などで柱を太くしていく感じですよ。

大崎——中心となる柱を先に作って、それから屋根をつくるのですか。

鈴木——正確な手順は分からないですね。ニワシドリの東屋は一発で仕上げるといよりは、ずっとつくり続けていくもので、途中経過しか見られないんです。ただずっと増築していくから、少しずつ補強を積み重ねていってるのかなという感じはします。

大崎——シェルのようなものではなくて、普通の枝が絡み

合うことによる剛性で出来ているということですね。

巣の役割

鈴木——鳥の巣というと、鳥さんのお家だと思っている方が多いですが、そうではなくて、卵とヒナを安全に育てる場所だと思うんです。キムネコウヨウジャクの巣(図 7)を見ると分かりますが、筒状の部分が入り口なんです。で、膨らんでいる部分が産座といって卵が入っているところなんです。要するに、人間の妊婦さんのお腹の形と同じだと思うんですよ。人間はお腹の中で赤ちゃんを育てますが、鳥さんはそうすると体重が増えて飛べなくなってしまうので、子宮の役割をもつ部分を別のところにつくって、子どもを育てるようになったのではないかと思います。けれども卵やヒナは栄養があるので他の動物が食べたがります。敵に見つからず、暑さ寒さに耐える環境をつくるために工夫を重ねて、こういう形になったのではないかと思います。

大崎——鳥の巣が卵やヒナを育てるためのものだというのは、多分、普通の人には十分に理解していないと思います。私も鳥が住むところのように思っていました。ですから、他の生物の巣や人間の家とは目的が全然違うということだ



①回りながら石を集めるので、石を集めた平たい巣ができる。②回りながら積み上げていく。お椀型になる。

③回りながらさらに自分を囲うように集めると球体の巣になる。入り口を横に出していくと中央の巣のようになる。右は入り口が下向きになった巣（キムネコウヨウジャクの巣）。

図 13 巣の成り立ち (画: 鈴木まもる)



図 14 北京国家体育館 (提供: Liu Zhengnan)

すね。

巣の成り立ち

大崎——一般的な話ですが、鳥の巣づくりというのは、つくり始めると決まりきった動作を続けていだけなのか、あるいは場合によっては途中で方法を変えることがあるのか、教えていただけますか。

鈴木——そもそもどうやって鳥が巣をつくるかという、人間がろくろを回してお茶碗をつくるように、鳥さんは自分を中心として回りながら巣をつくっていくんです(図13)。コチドリさんという、地面に卵を産む鳥がいます。その鳥さんは丸い卵が転がっちゃう不安が出てくると、転がらないように石を持ってくるんです。更に、別の方向から蛇が来て食べられちゃうんじゃないか、風が吹いてきて飛ばされるんじゃないかという不安が出てくるたびに石をいろいろな方向に対して置く。

大崎——形が最初から端的に決まっているのではなくて、それぞれの段階で本能的に判断しながら形が出来ていくということですね。形そのものではなく、つくり方を本能として知っている。

鈴木——そうですね、鳥の種により巣のつくり方は違いますが、基本的には外装(大きさや長さのある巣材)から始まり、内部にいくに従い細かく繊細な材料になっていきます。何か出来上がりのイメージがあるのだと思います。環境に合わせて、どういう場所で何を集めると安心できるかというのが、本能的に受け継がれているのではないかと思います。

います。

鳥の巣から建築を見つめなおす

「鳥の巣」と呼ばれる建築

——「鳥の巣」と呼ばれている建築としてヘルツォーク&ド・ムーロン設計の北京国家体育館(図14)がありますが、様々な鳥の巣のお話を聞いて、大崎先生は改めてどのように思われますか。

大崎——この建築は設計変更で、屋根構造の開口部に設置予定だった開閉屋根が設置されないことになったんです。すると力の流れが大きく変わって、開口の縁を固めないといけないのですが、そうではなく別のところの部材を増やして行って、どんどん重くなったといわれています。鳥の巣も弱いところがあれば、枝を抜くのではなく増やしていくと思うんですね。そのあたりが、つくり方として似ているかなと思います。一方、建築構造の最適化は、まず全体に材料が敷き詰められていると考えて、要らないところを除いていきます。

鈴木——人間の場合は要らないものをとっていきそうですが、鳥の巣は本当に自分の必要なものだけを集めるから、シンプルなものになると思うんです。だから抜くというよりは、最低限のものでできていて無駄がない形ではあるのかなと思います。

付け足すといえば、翌年巣を足すことはあります。猛禽類は、繁殖期毎に新しい素材を付け足して新しい巣を古い巣の上につくっていくので、どんどん厚くなっていくんです。だからといって、構造的に悪くなることはないと思われま

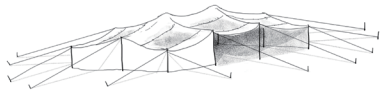


図 15 ベドウィンテント (図版作成：雨宮美夏)

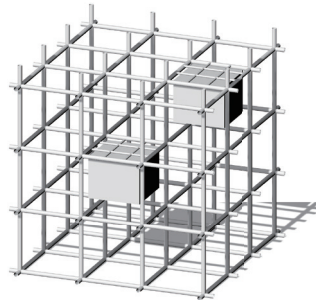
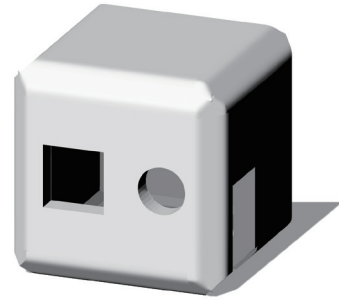
図 16 ジャングルジムのような枠組みに家を吊るす
(図版作成：竹岡里玲英)

図 17 モノコックボディ (図版作成：竹岡里玲英)

す。

大崎——前半に、途中で方針が変わることがないかということをお聞きしたのは、これと関連があって。人間の建物の場合は途中で方針が変わるなどして、混乱する場合があります。そうすると、最初から一直線で設計していけなくなってしまう。人間の建物は用途変更も含めていろいろ変更がありますので、機能だけで形は決まらないですね。先ほどの鳥の巣の話で、全体の構成を把握しているのではなくて、各部分に必要な機能や性能をもたせるため、一つ一つ手続きを積み重ねてできていると聞いて、非常に納得しました。人間の場合は全体も見て評価しないとイケない、そのあたりが違うかなど。スケールだけの問題ではないと思います。

身の回りのもので建てられる住居と鳥の巣

大崎——それぞれの場所で手に入れやすい材料を使って生成できる膜構造の例としてベドウィンテント (図 15) などがあります。手元のものしか使えなかった時代の住居は、鳥が材を入手して、自分たちでつくるのと似ていると思います。また、人が自分の手だけでつくることのできるサイズで、それが鳥と巣のサイズ感に似ているという意味もある。それより大きいものは必要なかったんです。

鈴木——現代の住居の形態は直方体や立方体、使いやすい寸法や、規格が決まっていて、効率よくできるようになっていると思うんです。でもこういう家はそれ以前のものだから、造形的なつくり方としては、鳥の巣と同じだと感じます。どちらが良いということはないと思います。

大崎——そうですね。膜構造を例に出したので、鳥の巣とは形は違いますが、構造的な形というところでは、その点でも鳥の巣に似た例がいろいろ見られると思います。ただ、お話にありましたように、鳥の巣は子どもを産むための短い期間のもので、人間の住居は長い期間住むものですから、そこは大きな違いです。

鈴木——やはり、使用期間が決定的に違うところですよ。何年も使い続けられるというのは人間の家のもっている

役目だと思います。

そして、鳥の巣から学べること

——鳥の巣と人間の建築のあいだにある目的の違いが、スケール感の違い等に関わってきているのでしょうか。

大崎——つくり方で重要になるのはやはり重さですね。材料の重さが全然違うので難しいですけども、例えば建築のドームを上からつくっていくことができれば、話が全然違うと思います。今は地上で組み立ててリフトアップするというやり方もありますが、下からつくっています。例えば鳥が回りながら巣をつくっていくように、真ん中に柱を立てて、その周りに段々広げながら屋根をつくることできれば、全く違った構造や施工方法が生まれるのではないかと思いますし、将来それができれば何かが変わっていくでしょうね。だから、鳥から学べることのひとつにはそういうつくり方があるんじゃないでしょうか。

鳥の巣に学ぶとしたらもう一つは吊るすということになると思います。吊るす鳥の巣はいくつかありますが、人間のつくる建物は吊るすことはほとんど無いんですね。ただ、例えばジャングルジムみたいな枠組みをつかって、家をその下に吊るすことも、可能といえば可能なわけですよ (図 16)。吊るすと建物は安定しますし、地震荷重もこの骨組みがちゃんともっていれば問題ありません。以前地震に強い建物をつくるために、モノコックボディ (図 17) という基礎を固定しないサイコロみたいなものを標準として、その中に家をつくれればいけないかという話がありました。その場合、ユーティリティ (水道、ガス等) をどうやって入れるかということが一番問題になります。吊るすと上から入れられるので、そのような問題は生じないと思います。

他には供用期間の違い、設計変更や用途変更の有無といった違いもありますが、鳥の巣を建築に当てはめる上での一番の問題は設備、環境だと思います。

それから、装飾性の違いですね。人の建築は遠くから見て綺麗である必要があるという側面もありますが、鳥は巣の全体の形や色を理解しているのでしょうか。

鈴木——外観に関しては人の感覚とは違うと思います。内

側からの視点での満足、不満足を気にしているのではないのでしょうか。例えばウグイスの巣(図18)は球体なんですけど、縦長、横長、外がボサボサしているもの、と外観自体はそんなに統一性はなく、人間がいう外観よりも使う空間や内装への意識がしっかりしている。

大崎——なるほど、確かにそうですね。

鈴木——色は理解しています。鳥のオスがあんなに綺麗なことから、色を感じているのは明らかです。ただ、巣は見つからないようにする方向性なので、ニワシドリ以外はほとんど周辺の地味で目立たない素材を選んでいきます。

大崎——そうですね、目的が目立たないこと。じゃあ別に、綺麗である必要はないですね(笑)。

鈴木——逆にいうと、それが環境に調和して綺麗なんだと思うんです。

——鳥から既に学んでいる部分も実際にあるようですが、形そのものを大きくするのは、やはりスケール効果的に難しいのではないのでしょうか。

大崎——これはもう、明らかにどうしようもないと思います(笑)。建築に関しても、小さい建物で有効でも大きい建物では有効でないことがありますし、模型で実験しても全体の実寸では同じような結果にはならないです。鳥の巣もそのまま大きくすればいいわけではないと思います。

つまり枝を梁としてそのまま太くするのではなくて、骨組みを組む、あるいはそれぞれを中空のパイプにするというような必要が出てくると思います。

先程、上からつくる、真ん中に柱を立ててそこから広げていくという話をしましたが、例えば10mくらいのテントのようなドームであれば、上からつくっていくことは可能です。そのままそれを100mのドームにすると難しいと思いますが、50年後ぐらいにスケール効果を克服できれば、鳥が巣をつくるような方法が当たり前になるかもしれないと思っています。

——実現するかどうかは別として、形も含め鳥の巣から人間の建築に生かすべきとお考えのところはありますか。

鈴木——先生がおっしゃったように鳥の巣をそのまま大きくするというのは無理ですが、鳥さんたちが自分の大切な命を守るために巣をつくっているという心の部分の大切さは、建築でも同じだと思うんです。あとは人間が暮らしに合わせてやっていくことなのかなと思います。

大崎——そうですね。自分の家を愛すること、愛着をもって建物をつくることは学べると思います。あとは、それぞれの部分の機能の積み重ねによって全体が出来ていくという話は昔からあると思うんですけども、鳥の巣の成り立ちからはそういう面も学ぶことができると思います。

鈴木——鳥の巣をそのまま人間の建物に生かせることや学べることもありますが、鳥の巣が使われるのは巣立つまでという点でやはり建築とは根本的に違うと思うんです。人間の暮らしは多様化しているので、「住む」ことに関して鳥の巣から学ぶには相当無理があるとは思いますが。逆に、「生きる場所とは何か」というのを鳥の巣から学ぶことはできるのかなと。多様で速度が速い今の世の中では忘れてしまいがちな、「命が育つ」という一番根本的な部分を大切に、それを上手く今の社会に適応させていくことが建築には求められているのかなとは思っています。



図18 様々なウグイスの巣(提供:鈴木まもる)



インタビュー中の様子



——お二人にとっての美しい構築物は何か、お聞かせいただけますか。

大崎——私にとって美しいのは、力学的に美しいものです。月並みな例ですけども、建築だと代々木の体育館が一番美しいと思っています。あとは東京タワーやスカイツリーといったタワーも美しい。それから建築以外だと、例えばF1の車ですね。若いころはテレビでF1を全部見て、ただ単に車が走っているのを美しいと思っていました。アメリカだとオーバルコース（楕円のコース）を単にぐるぐる回るレースがあるのですが、それも美しいと感じていました。私にとって美しいものというのは、機能的に優れたものです。ですから、鳥の巣もそれぞれの部分の意味や役割が分かれば、美しいと思うようになると思うんですね。特にカムリオオツリスドリの巣などぶら下がった形は美しいと思います。それぞれの機能で出来上がった形が理想です。

鈴木——僕は30年以上前に偶然見つけた鳥の巣をすごく好きになったのですが、はじめは、なぜ絵本作家の僕が鳥の巣を好きなのか全然分からないまま鳥の巣を集め続けていました。ですが、あるとき山の中で、鳥の巣も、僕が描いている絵本も、小さな命を育てるためにつくっているという点では同じで美しいのだと分かったんです。鳥の巣は鳥の親が一番大切な子どもたちを育てるためにつくるもので、絵本も人間が小さい子どもたちの心が育つためにつくるものなんです。鳥の巣づくりって誰かから教わったり、流行りを気にしたりはしないんですよね。僕なんかはやはり雑念が入ってしまいますが、鳥さんは雑念無しでつくっているから無駄もないし、シンプルで綺麗なんだと思うんですよ。その共通点は絵本作家の僕だけの話ではなくて、例えば建築家の方が家を建てるのも、パン屋さんがパンを焼くのも、運送屋さんが車の運転をするのも、仕事は皆突き詰めていくと、新しい命が育つことに繋がると思います。もちろん今の世の中、お金のためという側面もありますけれどね。でも逆に、知識や情報やお金がいっぱいあればあるほど、見えなくなっているものが多いと思うんです。教わらなくとも、鳥さんは自分の一番いい場所で巣づくりして、一番大切なヒナを育てる力があるんですよ。人間だってそうだと思うんです。でも今の世の中は子育てに悩んだ

りだとか、いろいろ問題が出てきてしまっているじゃないですか。だから、鳥の巣から生きる上での一番大事な部分を感じてほしいし、自分としてはそういうものを作品で出していきたいと思っています。

最後に

大崎——事前にいろいろ拝見して勉強はしていたのですが、鳥の巣のことはほとんど分かっていなかったというのが、第一の印象です。生物に学ぶ構造という、バイオミメティクスには植物も含めているいろいろあり、その中で鳥の巣という一つの生物の形を深く知ることは、私にとっても重要だと思いました。非常に多くの経験と知識をもっておられる鈴木さんのお話を伺いましたが、鳥のことを話されるときに、「この子は」と言われるところにすごく愛情を感じて感銘を受けました。本当に建築も鳥の巣から何か学べればいいなと思っています。ありがとうございます。

鈴木——卵とヒナの命を守りたいという思いはどんな鳥も同じで、多様な地球環境のなかで、それぞれ適応しているいろいろな巣が出来ています。これを人間に置き換えると、いろいろな巣の形は職業になると思うんですよ。それぞれの場所で自分に合った仕事をしつつ、人間という種を育てているのではないかなと思います。人それぞれどのような職業についてもいいと思うんです。仕事を通じて、人間の子どもたちを元気に育てていくことに、何らかの形で関わるようになっていくと思うので。今はお金とかいろいろ大事なこともありますけれど、命を大切に暮らして欲しいです。



アトリエ外観（提供：鈴木まもる）